

24 時間とか365日という「時間」は、この世で生きていくとき、その概念の中で営みを捉えるのが便宜的であるというおもしろ理由で発明されたという説があるが、私には深く頷ける。あなたにはないだろうか。たとえば10〜20年前の遠い出来事であるはずが、突如昨日のことにように細部まで蘇り、それが「今、ここ」の自分自身に深い意味を持って、影になり光となり迫ってくる。終わったことであるはずの出来事が、果てない未来の夢につながっていたという事実、あるとき気づくこと。それはまるでタイムトンネルを螺旋状に廻って、鮮やかに眼前に展開してくる風景であり、「今」を凌駕し、圧倒される心地だったりする。一瞬一瞬の「生」の手触りを確かめながら未知なる世界に挑み続ける「冒険者」という人種は、存在の深いところで「始まりは終わり、終わりは始まり」という真実に、常時触れている人々といっている。植村直己という日本を代表する冒険家は、とくにそういう人であり、そういう人であった、と思う。

厳冬の北米マッキンリー単独行の下山途中、消息を絶ち、遺体さえ見つからない「謎に包まれた」最期とされたのは1984年2月12日、彼が植村直己として生まれてちょうど43年目の日にあたる。死に様は人を映すというが、死と生という、点と点をつなぐ場所は、数字というメタファーとなり、彼と

いう人間を色濃く浮かび上がらせた。その2か月後、国民栄誉賞受賞が決まり、輝かしい冒険の数々とあわせて多くの人に記憶され、語られる伝説の人として固まった。数字のメタファーについて余談であるが、冒険的人生を歩んだ魂は43歳で一つの生を終えることがよくある。一例を挙げれば長谷川恒男、森田勝（ともにアルパインクライマー）星野道夫（写真家）、河野兵市（冒険家）…。彼らには自分の足を信じて世界を闊歩し、人との出会いを大切に活かしたという共通点がある。

21世紀北東アジア平和への鍵が波間のどこかに浮かんでいるはずの「日本海」。中国山地からその海へと注ぐ、円山川の流れる瑞々しい地、兵庫県日高町（現：豊岡市）に、1941年に生まれた植村直己は、小さい頃は年長の兄弟に可愛がられる甘えん坊の男の子だったという。明治大学に進み山岳部に入部、部活一色で学生時代を過ごした卒業後、まだ海外旅行に行く人も少なかった1964年、母の反対に対して男泣きに泣き、最後は押し切る形で単身、世界を渡り歩くことを始める。無名時代にはフランスのスキー場などで各地でアルバイトをしながら身体づくりをしたり、遠征資金を貯めた。しだいに頭角を現し、1970年には日本人として初めて最高峰・エベレストに登頂するという栄誉にも浴した。アマゾン川筏下りなどユニークな冒険も成功させ、途中ピラニ

アを釣って食べた豪快なエピソードは語り草となっている。後の世代の冒険家や探検家の登竜門、日本列島徒歩縦断も植村が元祖だ。現在、北極圏で犬ぞり活動続ける探検家の山崎哲秀は高校時代、植村の冒険の記録である著書『青春を山に賭けて』を読み、自分の人生の方向性を決めている。8000メートル峰に精力的に向き合った登山家の戸高雅史もまたそうであった。希望という名の鉱石から放射される光は遮る物知らずあちこちに届き、磁場を形づくり自分以外の命にも影響を与えよう。

植村らしい冒険といえはやはり極地での活動であろう。北極圏での生き生きとした冒険は多くの記録に残され、今でも私たちはそれに触れることができる。グリーンランド3000キロ、北極圏12000キロを犬ぞりで走破した。北極圏到達の際には、池田錦重率いる日本大学隊と名勝負を繰り広げ、それを目撃した人は今でも興奮気味に当時を回想する。

植村が犬ぞりのトレーニングもかねてグリーンランドに滞在した時期には、イヌイットの老夫婦と養子縁組をするほど現地に溶け込んだ。底ぬけに明るい笑顔に励まされたと言語人は多く、それは、国境を超えても変わらず植村の美点であり続けた。夢を追い、叶えた夢を感謝に変え、喜びを惜しみなく分かち合える、陰ひなたのない純粋な性格は生涯変わらなかった。彼は

国籍や民族をやすやすと超える根っからの地球人だったし、北極圏の冒険で「人からお金（寄付のこと）を集めて好きなことをしている」と陰口を叩く人もいたけれど、今風に言えばその行動範囲から考えて「民間レベルで国際交流を推進した」かなり大きな功績となっていたことは疑いない。1974年には公子夫人という伴侶も得、「ごくふつうの」人生の充実も手にしている。

さて植村直己の圧倒的なエネルギーとそのエッセンスはどこから来ていたか。もちろん目標に向かっておおいなる努力は誰よりしたはずだ。それに加え、彼はほとんどの人が「無理だ」と諦めてしまうような自分の夢や情熱を打ち消さず、かといって過信もせず、いつか実現することを信じてやりたいことに「ただ」正面から向かっていただけであった。すべてはつながって存在する以上、自分自身が咽いているならば、必要な助けは得られるし、やると決めたことに力を与えられることを知っていた。

そんな植村でも、やり残したことはあったようだ。夢にまで見た南極大陸での冒険は、領土争いに端を発したフォークランド紛争に阻まれて、とうとう実現できなかった。ライバルで友人だった池田にはそれ以来何度も浮かんできた。「池田さん、次は南極に行こう」と言った、雪焼けした植村直己の煌々とした顔が…。

植村直己という生き方

冒険家の代名詞とも言える、植村直己。

43年という短い人生ながら、次世代に残した影響は大きい。

冒険とは何か？ 彼の生き方がその答えだ。

Naomi Uemura. The name is synonymous with "Adventurer".
Whilst his life of only 43 years was short, his legacy left to the next generation is large.
What was adventure to him? His way of life shows us the answer...

黒田麻衣子◎文

Text: Mayuko Kuroda

写真提供=文藝春秋 Photo: Bungeishunju

ADVENTURE



1978年4月29日、世界初の北極点単独行に成功した植村直己。文藝春秋のカメラマンが、到達直後の植村を撮影した。55日に及ぶ犬ぞりの旅を経て疲労も極限のはずだが、顔には屈託のない満面の笑みが浮かんでいる。裏に植村らしい一枚だ